日本先天性心疾患インターベンション学会　［本学会の前身　日本 Pediatric Interventional Cardiology 学会(JPIC)］　前代表幹事で名誉会員の加藤 裕久先生（久留米大学名誉教授）（享年 89 歳）が令和 7 年 3 月 14 日にご逝去されました。

若い先生は御存じ無いと思いますので、本学会における加藤先生のご功績について少しだけご説明を差し上げたいと存じます。

近代の先天性心疾患に対するカテーテル治療は、Johns Hopkins 大学の Jean Kan 先生が 1982 年肺動脈弁狭窄の患者に対するバルーン形成術を報告したことに始まります[1)]。加藤先生はその学会抄録を見るや、当時久留米大学からトロントに留学していた横地一興先生にバルーンを持ち帰ってもらい、1984 年アジアで初めて肺動脈弁狭窄に対するバルーン拡大術を行われました[2)]。当時お二人は医師生命をかけてこの治療に臨まれたと伺っています。当初は心臓外科医からの bashing もありましたが、その後多くの施設がカテーテル治療を行うようになりました。

そして 1989 年加藤先生主催のもと久留米で行われた第 25 回日本小児循環器学会の際に、発起人の先生方が集まられ、翌年 1990 年加藤先生を含めた 4 人の先生方を代表幹事として、第 1 回　日本 Pediatric Interventional Cardiology 研究会(JPIC)が大阪で開催されました。これ以降、各種先天性心血管病に対するカテーテル治療が開発され、現在に至っているのは皆さまご承知のとおりです。

診断と内科的治療だけしか出来なかった小児循環器医が、循環器内科医と同様にカテーテル治療が行えるようになり、現在会員の皆さんが活躍できているのは、ひとえに加藤先生のお陰です。

加藤先生に感謝申し上げるとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

日本先天性心疾患インターベンション学会

文献

1. J S Kan, R I White Jr, S E Mitchell, T J Gardner. Percutaneous balloon valvuloplasty: a new method for treating congenital pulmonary-valve stenosis. N Engl J Med 1982;307:540-2.
2. 横地 一興, 三ケ島 尊利, 一ノ瀬 英世, 坂本 博文, 豊田 温, 加藤 裕久, 鈴木 和重. 研究 先天性肺動脈弁狭窄に対する経皮的 balloon valvuloplasty の試み　心臓 1985;17:1225-1231